教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 英語グローバル学科　　資格： 准教授　　氏名： 川西　慧

研究分野	研究内容のキーワード
外国語教育論	高等教育　学術目的の英語（EAP）　ライティング　フィードバック
学位	**最終学歴**
博士（人間・環境学）修士（人間・環境学）Honours B.Sc.(Psychology)	京都大学 人間・環境学研究科 博士課程 研究指導認定退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.Google ClassroomとYouTubeを利用した研究指導動画の作成	2018年7月23日～現在	ゼミオリエンテーションをもとに、CiNiiやGoogle Scholar、オンライン蔵書目録（OPAC）の利用に関する指示動画10本を作成し、ゼミ学生ら向けに公開した。（一例：https://youtu.be/NP1sCVJ-BrI）
2.内容言語統合型学習(CLIL)と英語を媒体とした英語で教える(EMI)授業の実施	2017年4月～現在	内容言語統合型学習(Content and Language Integrated Learning: CLIL)では、外国語を学ぶのではなく、外国語で専門的な内容を学ぶことが対象とされる。「英語の文化的背景」の授業においては、英語で書かれた原著購読を通し、講師が英語で授業をする形式(English-medium instruction: EMI)をとっている。
3.Dropboxを利用した講師連携	2017年4月～現在	英語による講義担当講師として、日本語による同教科担当講師と連携し、ハンドアウトを作るなどした。
4.Explain Everythingアプリを利用した指示動画の作成	2016年9月～現在	英語学入門において、音節、語形成、統語などの図示、卒業演習（4年ゼミ）におけるMOVE分析の実施法、1年生を対象としたmwu.jpやGoogle Classroomの使用法などに関する動画を作成し、公開している（https://youtu.be/F727djKcq0E）。
5.Google Classroomを使用した授業外学習の促進	2016年9月～現在	学習管理システム（Learning management system: LMS)であるGoogle Classroomを使用した授業外学習の促進。特に、課題の配布、回収、フィードバックの他、教科書以外の資料紹介などにも利用している。
6.近畿大学経営学部IIPコースにおけるNingを使用した講師間連携と授業外学習の促進	2013年4月11日2014年3月31日	近畿大学経営学部Intensive International Program (IIP)の講師間連携と学習者の授業外学習時間確保のため、Kitzman准教授らとNingというソーシャルネットワークを使用した取り組みを行った。具体的には、課題をNing上で公開するよう指導し、写真や「いいね」、コメント機能などを利用して学習者のインタラクションを増加させることに成功した。こうしたICTを利用したライティングでは、講師や授業を超えたつながりが見出され、また評価の際にも添削だけでなく、肯定的なコメントも可能となった。
7.全学共通教育国際シンポジウムに向けた夏休み集中講座	2012年9月3日2012年9月7日	京都大学の学部生にアカデミックライティングを指導する「研究の世界B」の授業を担当した。授業では、シンポジウムに向けての論文執筆に関する指導とフィードバックを行った。特に学生が困難とした「結果」と「考察」の書き分けなども、genre-basedライティングの方式に則り、それぞれの分野の論文のMOVE分析などを通して特徴を把握させ、執筆の助けとした。その様子の一部が以下にて公開された(http://www.viz.media.kyoto-u.ac.jp/sympo2012/archiveSummer4thDay.html)。
2 作成した教科書、教材		
1.英語の発音関連科目の教材	2018年4月1日現在	科目コーディネータとして、シラバスの改定に伴い、補助教材を作成した。具体的には、英語の母語話者を目指すという規範主義的なシラバスを改定し、外国語運用能力として発音を捉え直したため、コミュニケーション能力や、やりとりを重視した課題や評価指標を作成した。また、米国や英国の英語母語話者を規範と

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		した教材が多いため、外国語学習者・使用者間での英語コミュニケーション（共通語としての英語，English as a lingua franca）に関する概要説明の共通教材を作成した。これらは英語文化学科と英語キャリア・コミュニケーション学科の1年生全員を対象に利用される。
2.剽窃と引用に関する指導教材	2017年7月	初期演習を中心に学年団で利用する目的で、剽窃と引用に関する教材を作成し、利用した。
3.Academic Writing授業におけるピアフィードバックのモデリング動画作成	2013年6月	京都大学の1回生向けのアカデミックライティング授業において、ピアフィードバックへの導入となるモデリングの動画2編(http://youtu.be/tnL7t-HBK1s 及びhttp://youtu.be/GwmISdRNLH0)を作成した。具体的には、ひとりが執筆した「結果」部分ともうひとりが執筆した「考察」部分の「一貫性」の向上を図るための共著ピア活動である。動画は授業とは別の題材を用いてTAふたりが一貫性について話し合う様子を収録しているが、このタスクの作成、動画の作成、録画、編集を行った。
4.Academic Writing授業教材の作成	2012年4月1日～2016年3月31日	アカデミックライティング科目のTAとして採用された後、京都大学のライティング授業担当教員と連携し、同大の学生に合うgenre-based教材を作成した。具体的にはプロトタイプ的な論文を選定し、学生が授業内でMOVE分析を実施できるよう一部用語に訳をつけたり、解答例を作成したりした。また、これとは別に、パラグラフライティング、エッセイライティングに関するタスク作成や模範文作成にも貢献した。これらの教材はいまだ同大で使われている。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.国際教育交換協議会（CIEE）日本代表部 TOEFLスキルアップセミナー 講師	2018年6月17日	米国Educational Testing Service公認 TOEFL トレーナーとして、日本・国際教育交換協議会（CIEE）の公認講師として、関西地区のTOEFLスキルアップセミナーを受け持つ。具体的には、TOEFLを受験したいという学習者に対してセミナーを開催している。キャンパスプラザ京都にて、大学コンソーシアム京都とCIEEが共催するTOEFL iBT テストスキルアップセミナーを担当した。
2.国際教育交換協議会（CIEE）日本代表部 TOEFLスキルアップセミナー 講師	2012年10月1日2014年3月31日	国際教育交換協議会の公認講師として、関西地区のTOEFLスキルアップセミナーを受け持った。具体的には、TOEFLを受験したいという学習者に対してセミナーを開催した。2012年度は関西圏の学習者を対象に関西大学で開催したセミナーの他、京都の学習者を対象にきらっ都プラザにおいてスピーキング・ライティングの産出技能の講師を担当した。2013年度は関西大学、きらっ都プラザ、近畿大学で行われたセミナーで四技能の講師を担当した。
3.第3回全学共通教育国際シンポジウムに向けた夏休み集中講座:研究の世界B講師	2012年9月3日2012年9月7日	上述した京都大学の第3回全学共通教育国際シンポジウムの開催に際し、学部生の研究論文執筆の補助として設置された夏休み集中講座「研究の世界B」の講師を務めた。講座では、詳細なアカデミックライティングの指導を行った。具体的には、少人数のクラスで、それぞれの学習者に選定させたそれぞれの分野の論文のMOVE分析に取り組ませ、当該分野のディスコース・コミュニティに合った論文の執筆を心がけるよう指導した。
4 その他		
1.外国人非常勤講師向けのICT関連FD	2019年9月18日2019年9月24日	ライティング科目コーディネータとして、ライティング科目でのICT活用（ワードプロセッサを利用した文書作成、剽窃防止）を強化するため、授業開始の第一週目に外国人非常勤講師向けにGoogle Classroomや剽窃チェッカーturnitinの使用法を英語で解説し、質疑応

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
		答できる場を設ける。
2.外国人非常勤講師向けのICT関連動画作成・公開	2019年8月4日～現在	学習管理システムであるGoogle Classroomや、剽窃チェッカーのturnitinについて、外国人非常勤講師向けのオリエンテーション動画5本を英語で作成、YouTubeで公開した。https://www.youtube.com/playlist?list=PL-1fq9YRGne3U-jQcgDPAGPVObt-1GEAu
3.指導学生の論文のMukogawa Literary Review (2018)掲載	2018年3月	ゼミで指導した学生の論文が第55号Mukogawa Literary Review誌に掲載された。Ono, A. (2018). Coherence and cohesion in EFL learners' text: An analysis of one EFL learner's writing. Mukogawa Literary Review, 55, 44-62.
4.指導学生の論文のMukogawa Literary Review (2017)掲載	2017年3月	ゼミで指導した学生の論文が第54号Mukogawa Literary Review誌に掲載された。Koyama, S. (2017). Addressing the current problems of Australia's policy on Indigenous language education and offering some possible solutions. Mukogawa Literary Review, 54, 37-54.
5.中学校英語弁論大会 ボランティア講師	2009年7月1日2009年10月31日	香川県小豆郡土庄町立土庄中学校にて、英語弁論大会の指導補助を務めた。ALTの交替時期でもあった夏休み中、学生の執筆した作文をスピーチ原稿にする翻訳、英語チェックの他、ESS部員とその他教員から選出された生徒の発音、イントネーションや表現の指導にも関わった。その結果、指導した1名が小豆郡代表に選出され、その後、香川県代表として高円宮杯第61回全日本中学校英語弁論大会に出場するに至った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.京都大学OCW教材作成と編集のコーディネーター	2013年5月	京都大学アカデミックライティング研究会が主催したLeeds大学のDr. Judith Hanksの講義の際、コーディネーターとしてOCWの収録に関わった。具体的には、講師と編集者の間で録画の際の話し合いに参加し、講師と撮影スタッフ側の要望のコミュニケーションが円滑に行われるよう通訳をし、実際の講義の際も講師紹介役を務めた様子は収録されている。その後も、編集の際に講師の要望を撮影スタッフに伝える役を担った他、講義の視聴を通して要旨を作成するなどした(http://www.youtube.com/watch?v=2WBkmWgAPOA)。
4 その他		
1.学科FD：「AIと英語教育・学習」	2024年2月16日	「AIと英語教育・学習」と題し、本年度実施した調査の報告と、AIを使ったライティングへのフィードバックに関するワークショップを行った。
2.オープンキャンパス模擬授業	2023年7月9日	オープンキャンパスにて、コミュニケーションを重視した英語授業をケビン・バートレット先生とともに行った。
3.オープンキャンパス模擬授業	2023年6月25日	オープンキャンパスにて、コミュニケーションを重視した英語授業をケビン・バートレット先生とともに行った。
4.FD委員	2023年4月2024年3月31日	FD委員として学科を代表し、ファカルティ・ディベロップメントの運営に関わった。
5.高校での出前授業（大阪府立桜塚高等学校）	2019年9月11日および2019年9月30日	大阪府立桜塚高等学校にて出前講義を行う。
6.オープンキャンパス模擬講義	2019年8月9日	オープンキャンパスにて、「ジャンルに基づいた文法」というタイトルで模擬講義を行う。
7.学生委員	2019年4月1日2020年3月31日	学生委員として教学局運営に関わっている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
8.多様性への配慮に関する声明の執筆	2018年9月15日	ハラスメントを防止し、多様性に配慮した教育の場を確保するために、学科として多様性への配慮の文書を作成することを考案した。松原陽子先生、ナサナエル・ルドルフ先生とともに日本語版・英語版を作成し、学科長の了承を得て専任・非常勤教員に配布した。
9.学生委員	2018年4月1日2019年3月31日	学生委員として教学局運営に関わった。
10.Educational Testing Service公認 TOEFL ITPトレーナー	2017年9月14日2019年9月14日	米国ETSとの面接・試験を経て参加者として選出され、日本からの代表としてワークショップに参加し、審査の結果トレーナーとして合格、公認を受けた。近年需要の高まっているTOEFL ITP試験についての教員養成(teacher training)であるPropellワークショップを各地の大学などで開く。学習者の援助としては、留学やスキルアップを目指す学生の留学準備の補助にも力を入れる。
11.Propell Workshop for TOEFL iBT Test修了証	2017年9月	TOEFLの日本の事務局である国際国際教育交換協議会(CIEE)が主催するETS講師による英語講師向けワークショップを受講し、実際のTOEFLの問題や採点について学んだ。特に、スピーキングやライティングといったiBTテストの特徴ともいえる産出技能の測定について、実際にのスコアがどのような解答であるかなどもBenchmarkと呼ばれる解答例を用いて確認した。
12.オープンキャンパス模擬講義「英語の歴史」	2016年8月12日	オープンキャンパスにて、「英語の歴史」というタイトルで模擬講義を行った。
13.Propell Workshop for TOEFL iBT Test修了証	2012年9月	TOEFLの日本の事務局である国際国際教育交換協議会(CIEE)が主催するETS講師による英語講師向けワークショップを受講し、実際のTOEFLの問題や採点について学んだ。特に、スピーキングやライティングといったiBTテストの特徴ともいえる産出技能の測定について、実際のスコアがどのようなものであるかなどもBenchmarkと呼ばれる解答例を用いて学んだ。本ワークショップ受講後、受講者の中から選ばれ、CIEE公認講師として関西地区のTOEFLスキルアップセミナーを担当した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.中・上級英語ライティング指導ガイド	共	2019年9月14日	大修館書店	（編著）山西博之・大年順子（全ページ）304（ページ）第11章（ページ未定）（著者）川西慧（分担）第11章「議論に一貫性と結束性を持たせるためのエッセイライティング指導」の執筆を担当した（章は単著）。（概要）まとまり・つながりとも呼ばれる、一貫性と結束性に着目し、パラグラフライティングからの発展としてエッセイを執筆する際に一貫性・結束性を高める指導法について考案した。テーマ・レーマや語彙的結束性などに言及しながら、中上級の学習者が書きがちな、つながり・まとまりのない文章を例に、いかにしてつながり・まとまりを高めることができるか論じた。
2.MAP grammar and relative clauses in EFL learners' writing	共	2017年12月	Routledge Research in Language Education	（全ページ）361（書籍名）A New Approach to English Pedagogical Grammar: The Order of Meanings （編者）Akira Tajino（ページ）148-159（分担）抽出不可。全体の構成、統計、執筆（著者）Noriko Kurihara, Kei Kawanishi, Kiyo Sakamoto（概要）学術目的の英語（English for academic purposes: EAP)のライティングや文法指導において重要視される。本章では、日本人学習者に難しい項目とされる関係代名詞について「意味順(MAP)」を用いた指導実践について報告した。3つの異なる熟達度レベルにおいて、翻訳、誘引、作文という自由度のレベルが異なるのテストを3種類行い、指導の効果を確認した。学習者の関係代名詞の使用は、3つの異なる熟達度すべてにおいて、すべてのテストで指導を通して有意な改善が見られた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
1.Constructing a genre-based instructional model for English academic writing: A focus on learners' discourse-level errors	単	2019年1月23日	京都大学博士論文	（全ページ）pp.235（概要） アカデミックライティングにおいては、ジャンルごとの典型的な形式及び正確な言語の使用が重視される。そのため、当該ジャンルにおける典型的形式や文法を含めた言語使用の特徴など、明示的知識を活用した指導の価値が論じられてきた。また、学術的な文章においては、指示や相などの文法項目が談話の抽象性によって影響を受けることが知られている。本稿では、総称・非総称について、談話の流れと文法機能に着目した明示的指導と誤用訂正による暗示的指導を比較し、その結果を踏まえてジャンルアプローチを用いた指導モデルを構築、検証を行った。その結果、読み手の理解を阻害するような総称・非総称の誤用は大幅に減少し、本指導モデルの教育効果を実証することができた。
2.Student revisions in EFL writing: Effects of self-review training	単	2012年3月	京都大学修士論文	（全ページ）pp.104（概要）本稿では、ピア・フィードバックを「与えること」の効果に関する先行研究をまとめ、修正(revision)トレーニングを積むことが、学習者自身に与える効果について実験群、統制群を設け分析した。フィードバックを与える側として、修正トレーニングを積むことがライティング力に貢献するというESL環境での先行研究とは異なり、本研究が調査したEFL学習者は修正トレーニングやフィードバックを「与えること」による学びを実感したものの、ライティングの質には反映されなかった。それどころか見直しや修正を促すことが、冠詞や複数形などの未習得文法項目において過剰修正につながることが明らかになった。
3 学術論文				
1.英語学習のためのAIツール使用に関するアンケート調査　英語リテラシー教育プログラムの実施に向けて	共	2024年3月	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要31号	川西慧・田中真由美・Kevin Bartlett・佐々木顕彦（概要）生成AIや自動翻訳の広がりを受け、学生を対象に現在のAIツール使用と英語学習に関するアンケートを実施した。その結果、多くの学生がすでにAIツールを使用していることや、さまざまな目的、その受け止め方（肯定的・否定的・相反する気持ち）が明らかとなった。今後の教育研究実践に資する結果が得られた。
2.The Role of AI Chatbots in Second Language Writing Instruction: Balancing Efficiency and Diversity with Equity	単	2023年12月	AsiaTEFL Proceedings 2023 : Papers from the 21st AsiaTEFL Conference (pp. 35-52). AsiaTEFL. （ISBN : 979-11-982534-0-8)	効率を求めて生成型AIで「正しい英語」や「科学英語」に変換することがいかに多様性や表象の公平性に影響するかについて論じた。
3.AI Chatbot と外国語ライティング ― ChatGPT は効率の他に何をもたらすか―	単	2023年3月31日	JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要第15号	本稿では、ChatGPTのようなAIチャットボットが第二言語ライティングに与える影響について検討した。リテラシーと権力の観点から、言語教育におけるAIツールの使用は、規範主義とを強化する可能性があり、それがさらに不平等を強化する可能性があると論じた。 チャットボットは、学習者の言語の「修正」と「変換」を提案することで、専門家によって構成されるディスコースコミュニティに入るために役立つかもしれない。しかしながら、言語を変換されることによって権力を維持するための規範主義的なあり方を強化することは、深い問題である。著者は、ライティングの教師は、AIチャットボットによって強化された規定的な言語使用の不平等な性質に挑戦し、交渉し、多様な声やあり方を認めるべきだと主張している。
4.学部生のライティングにおけるスタンス表現の探索(査読付)	単	2021年3月31日	JACET関西支部ライティング指導研究会紀要第14号	論文の執筆においては，書き手が議論を進める上でスタンスを示すことが必要である。本稿では，学部生にスタンス表明を担う伝達動詞を紹介し，執筆した成果物と録音した対面フィードバックを含むやりとりを記述・分析することにより学習者のスタンス表明を観察した。スタンス表明の語彙や時制・相についての指導を取り入れ，対面フィードバックにおいても先行研究の位置づけに目を向けるよう提案したが，伝達動詞を多く使っていた参加者でさえ英語ライティングにおいて適切な選択をすることは難しいようであった。また，別の参加者においては，日本語でも英語でも伝達動詞を取り入れずに要約しており，フィードバック前は，先行研究の位置付けな

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				ども欠落していた。このことから，適切な伝達動詞の使用が意識に上ることがあっても，実際に執筆する原稿にスタンス表明に関わる表現を取り入れることが困難な場合があることが示唆される。また，母語であってもスタンス表現が難しい可能性が見て取れた。
5.学術的な談話における理論と証拠の調整―総称指示と非総称指示の受容と産出をいかに測定するか―（査読付）	単	2019年3月31日	JACET関西支部ライティング指導研究会紀要第13号	本稿では、「一般化」と連動して変化する総称性について概観し、関連文法項目である総称指示と非総称指示についての測定方法について検討し、記述した。バイリンガル研究の知見を参考に、「風変わりな動物テスト」を外国語学習者向けに調整した。具体的には、モノの一般化と具体的な例外について測定するテストである。また、産出を測定するため、「一般化」を必要とする技能統合型穴埋めタスクを作成し、Target-like Use (TLU)の概念を元に義務的文脈での正用と非義務的文脈での使用（誤用）を計算することを提案した。
6.Sample to population: EFL learners' understanding of reference in academic text（査読付）	単	2017年8月	International Journal of Language Learning and Applied Linguistics World, Vol. 15 (4)	学術目的の英語 (English for academic purposes: EAP)のライティングや文法指導においては、定義文などに用いられる総称と、具体的現象の描写に用いられる非総称が行われる。本研究では大学の中上級の学習者を対象に、総称指示と非総称指示の受容的理解と産出的使用を調査した。その結果、受容的には、総称指示を習得しているように見受けられるものの、非総称についてはそうでないこと、また、産出のテストにおいては、総称指示を正しく使用する他、過剰一般化が起きており、そのために非総称の文脈においても総称表現を多用していることがわかった。非総称指示の誤りの多くは、総称指示の過剰使用によるものであった。
7.A Look at Written Corrective Feedback from a Discourse Perspective: The Teacher as a Reader Who Infers Learner's Intensions（査読付）	単	2017年3月	The Bulletin of the Writing Research Group, JACET Kansai Chapter, Vol.12.	(ページ)pp. 1-12（概要)本稿は、ライティングにおけるフィードバックを談話的観点から見直し、教師による誤り修正が、必ずしも学習者の意図した意味を汲んだものにならないという現象について明らかにした。これは、教師も学習者という書き手の一読者に過ぎず、読者がテクストを読む際には推論を働かせて未知の部分を埋めているということに起因する。本稿では特に、抽象と具体を行き来するような議論文の分析から、教師による誤り修正は、総称・非総称を文脈から推測し、相と数のねじれを解消し、一致させていることを明らかにした。
8.Developing Genre-Based Rubrics for the EFL Academic Writing Classroom（査読付）	単	2016年12月	Professional and Academic English: The Journal of the IATEFL English for Specific Purposes Special Interest Group, 48	(ページ) pp.9-15（概要)本稿は、学術目的の英語を扱う大学におけるライティング授業を想定し、ジャンルに基づいた教授法 (genre-based pedagogy)を背景理論とした上で、ジャンル別の文法や評価などの扱いについて、実際に評価指標(rubric)を作成し、実証研究をする中でその有用性を論じたものである。
9.大学英語ライティング授業の設計―ジャンルに基づいた教授法を取り入れて―	単	2016年3月	『平成27年度　英語の授業実践研究』、奈良女子大学国際交流センター	（ページ）pp.45-58（概要）本稿は、学術目的の英語を扱う大学におけるライティング授業の設計について記したものである。京都大学における英語教育の目的を整理した上で、全学共通科目として設定された一般学術目的の英語(English for general academic purposes: EGAP)のライティングコースの授業設計について取り上げた。ジャンルに基づいた教授法 (genre-based pedagogy)を背景理論とした上で、文法や評価などの扱いについて論じ、教材と学習者による成果物の具体事例を取り上げた。また、学習者からの授業評価の目安として、コース実施の事前事後で自由記述式のアンケートを実施し、テキストマイニングした結果を分析し、大学英語教育に対して学習者が抱えていた漠然とした不安が、実用的な英語を学び、論文の読み書きや文献の引用方法などについて学んだことに対する満足が伺える結果となった。
10.An Error Analysis on English Articles in Learners' TOEFL-	単	2015年3月	The Bulletin of the Writing Research Group, JACET Kansai	（ページ） pp.1-12（概要）本探索的研究は、学習者の執筆した議論文の論理と文法の関係を明らかにするものである。具体的には、冠詞に着目し、一般化に用いられる総称指示と具体化に用いられる非総称指示の誤用を分析した。その結果、一般化の際には裸名詞を

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
type Essays: A Focus on Generic and Non-generic Errors（査読付）			Chapter, Vol.11	多用する傾向、複数形とaを混同する傾向のほか、具体化の際に総称指示を適用してしまうなどの誤りが見られた。このことから、冠詞の用法は、論理性を正しく伝える上で必要不可欠であることが示唆として得られた。
11.論理性と文法を意識したライティング指導	単	2015年2月	『平成26年度　英語の授業実践研究―TOEFLRのための効果的英語学習法―』,奈良女子大学国際交流センター	（ページ）pp.19-28（概要）TOEFLの統合型タスクを用い、学習者のライティングの論理性を損なう文法的誤りを分析した。その結果、抽象的な定義や理論に関する記述をする際に過去形や非総称指示を誤って用いることや、具体的な事例やデータの記述をする際に現在形や総称指示を誤って用いることで、事例と理論とが書き分けられていないことが明らかになった。これらのことから、機能に合ったライティング指導の必要性が明らかになった他、統合型タスクの形式は、学習者の文法能力を観察する上で適切な手法だということも明らかになった。
12.TOEFLクラスにおける講師間連携の試み―リーディングクラスを事例に―	共	2014年2月	『奈良女子大学夏季英語実学講座 平成25年度英語の授業実践研究 ―TOEFLのための効果的英語学習法―2013年度報告書』,奈良女子大学国際交流センター	（ページ）pp.9-20（著者）細越響子・川西慧・加藤由崇（分担）2.1「本年度の試み」、特に技能統合に関する先行研究まとめ、3.「分析」、特に3.2.2技能統合力育成の観点からの分析。（概要）技能の統合に向けた講師間の連携を取り入れたTOEFLリーディングクラスの指導について報告している。具体的には、共同運営したリーディングクラスでのポートフォリオの活用や、統合型タスクに焦点を置いたリーディング方略の指導などを行い統合型タスクの困難さへの不安も聞かれたものの、大半の学習者の満足が得られた。
13.技能統合を意識したライティング指導	単	2014年2月	『奈良女子大学夏季英語実学講座 平成25年度英語の授業実践研究 ―TOEFLのための効果的英語学習法―2013年度報告書』,奈良女子大学国際交流センター	（ページ）pp.21-30（概要）技能統合・素材統合を扱うTOEFL統合型タスクを中心としたライティング指導について研究、報告している。統合型タスクを意識した指導の後、学習者のライティングにおけるリーディング・リスニング素材からの情報の再現率を調査した。結果として、事前テストでは読み取った情報に偏った要約の作成が多かったものの、事後テストにおいては聞き取った情報の割合が増え、素材間の関係性を示す機能を持った文の割合も微増した。このことから、技能統合のための方略指導の有用性が明らかになった。
14.Student errors and self-revisions in L2 writing: An exploratory study（査読付）	単	2012年9月	Proceedings of the 51st International Convention of the Japan Association of College English Teachers	（ページ） pp.224-228（概要）本稿では、上級レベル学習者の執筆したエッセイとその自己修正を分析し、名詞句の誤りの原因を探索した。その結果、「冠詞」や「複数形」といった文法項目について過剰修正が見られることがわかった。これらについて詳細に探索したところ、未習得の文法項目については「見直し」や「修正」を促すことが、過剰修正につながっているとの結果が得られた。ESL環境では肯定的に捉えられることが多い自己修正について、EFL環境では上級者といえども指導の際に注意が必要だということが明らかとなった。
15.アカデミックライティング授業におけるフィードバックの研究 ―Criterion Rを導入した授業実践からの示唆―（査読付）	共	2012年1月	『京都大学高等教育研究』，京都大学高等教育研究開発推進センター，第17号	（ページ） pp.97-108（著者）田地野彰・細越響子・川西慧・日髙佑郁・高橋幸・金丸敏幸（分担）『１．はじめに』、『２．フィードバック支援ツールとしてのCriterionの導入』、『５．おわりに―教育的示唆―』（概要）教師のフィードバック支援ツールとしてのCriterionの位置づけのため、導入クラスでの調査を行った。学習者のスコアとアンケートの分析を行った結果、Criterion導入によるスコアの有意な伸びが見られ、肯定的な意見も多く得られたが、内容についての添削が得られない、指摘を受けてもどう直せばよいかわからないなど、課題も明らかになった。これらに基づいて、教師が受け持つ領域、機械フィードバックに任せられる領域などの示唆が得られた。
16.Effects of learners' experience of providing peer feedback on their own writing（査読付）	単	2011年9月	Proceedings of the 50th Commemorative International Convention of the Japan Association of College English	（ページ）pp.612-615（概要）従来、ピア・フィードバックの効果は「受けること」として議論されてきたが、「与えること」の効果の優位性を示す研究(Lundstrom & Baker, 2009)が示された。これを受け、本稿ではEFL環境においても「与えること」とされる、修正トレーニングについて同様な結果が得られるかについて、学習者のライティングとアンケートから分析した。その結果、先行研究とは異なり、学習者は「与えること」による学びを実感したものの、それはライティングのスコアには反映されなかったばかりか、未習得文

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			Teachers	法項目について過剰修正が見られた。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.英語アカデミックライティングにおける指示―学習者による談話レベルの誤用とジャンルに基づいた指導の効果―	単	2019年9月7日	SFL研究会，上智大学	英語のアカデミックライティングにおいて、総称と非総称に関する学習者の誤用の原因を探索し、効果的な指導を提案するものである。 アカデミックライティングにおいては、当該ジャンルにおける典型的形式や文法を含めた言語使用の特徴など、明示的知識を活用した指導の価値が論じられてきた。また、学術的な文章においては、指示や相などの文法項目が談話の抽象性によって影響を受けることが知られている。談話の抽象性と相の関係は教育に応用されているものの、指示に関しては未だ研究が十分ではない。このことから学習者の執筆した文章を分析し、具体事象を表す指示と抽象概念を表す指示の使い方に困難があることを発見した。これを踏まえて考案したジャンル・アプローチによる指導では、明示的指導の効果とその学習効果の保持が認められ、今後のライティング課題や評価指標の作成などに示唆を与えるものとなった。
2.「ジャンル」に気をつけて読み書きしてみよう	単	2017年6月9日	武庫川女子大学	高校生を対象とした本講義では、談話共同体の中で共有される「ジャンル」という概念を紹介し、これを英語・日本語のライティングに活かす方法を探った。普段とは異なる観点からライティングを捉え直すことを目的とし、ジャンルの観点から、さまざまな媒体の文章を分析し、言語使用域、言語表現、文法などの差を比較し、異なる聴衆や媒体に向けたライティングの練習も行った。
3.レポート作成と語彙の選択：スタンスと伝達動詞に焦点を当てて	単	2017年2月21日	武庫川女子大学（高大連携・入学前教育）	大学に入学直前の高校3年生を対象に、英語や日本語でのレポートの執筆についての講義をした。特に、「序論」や「先行研究」をまとめる章に焦点を当て、スタンスを表す伝達動詞や語彙を紹介した。また、講義の中では、実際に出版された論文や新聞を利用し、同じ現象に対して異なる新聞社がどのようなスタンスで報道しているかなども分析し、アカデミックライティングに必要な技能である言及・引用について紹介した。
4.指導者に使い勝手の良いライティング指導実践ハンドブック作成の取り組み	共	2015年10月17日	JACET関西，同志社烏丸キャンパス	（発表者）大年順子・山西博之・川西 慧・山下美朋・ 嶋林昭治 （概要）ライティング指導研究会では、大学でライティングを指導する教員を対象にライティング指導の理論的枠組みから、日々の授業に即戦力として使用可能な教材とその指導方法、評価方法までを網羅した『ライティング指導実践ハンドブック』の作成に取り組んできた。今回の講演では、その概要および成果を紹介する。
２．学会発表				
1.Making Connections : Study Abroad During and Post Pandemic	単	2023年11月27日	全国語学教育学会第49回年次国際大会（つくば国際会議場/Zoom）	コロナパンデミックの途中に現地留学が叶わなかった学生をフォローアップし、パンデミック後の現地留学を経てどのように心境が変わり、英語学習や自己と向き合ったかを質的に調査した。その結果、オンライン留学をせざるを得なかった学生らには心残りや憧れの気持ちが強かったが、実際に現地に留学してみると、理想と現実の乖離から齟齬を起こして動機づけが下がるような経験をする者がいたことがわかった。それらを踏まえて留学や言語学習、大学生活を見つめ直す視点についてまとめた。
2.The Role of AI Chatbots in Second Language Writing Instruction: Balancing Efficiency and Diversity with Equity	単	2023年8月19日	The 21st AsiaTEFL International Conference, Daejeon Convention Centre, South Korea	効率を求めて生成型AIで「正しい英語」や「科学英語」に変換することがいかに多様性や表象の公平性に影響するかについて論じた。リテラシーと権力の観点から、言語教育におけるAIツールの使用は、規範主義とを強化する可能性があり、それがさらに不平等を強化する可能性があると論じた。
3.英語学習のためのAIツール使用に関するアンケート調査　自己、他者、AIとの対話による英語リテラシー教育プログラム	共	2023年8月19日	全国英語教育学会第48回香川研究大会（香川大学教育学部）	田中真由美・佐々木顕彦・川西慧・Kevin Bartlett （概要）生成AIや自動翻訳の広がりに伴い、大学生が実際にどのようなツールをどのような目的で使用しているかをアンケート調査した。その結果、多くの学生がすでにAIツールを使用していることや、さまざまな目的、その受け止め方（肯定的・否定的・相反する気持ち）が明らかとなった。今後の教育研究実践に資する結果が得られた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
の実施に向けて				
4.Making connections : Study abroad programs during the pandemic	共	2022年2月26日	Spokane Regional ESL Conference (Spokane/Online)	（発表者）川西慧・米田望来・西明日香・西本彩桜（概要）パンデミックと外国語学習・教育について調査するため、パンデミック中に海外留学から緊急帰国した学生やオンライン留学に参加した学生、これに関わった教員らにインタビューした結果をまとめた。パンデミック中に入学しオンラインで留学をした学生やそれを支援した教員からは、さまざまな「曖昧な喪失」の経験が語られた。こうした経験やつながりの喪失を踏まえ、今後の外国語教育、大学教育、留学のあり方についての示唆を議論した。
5.Voices from the Virtual Study Abroad during the Pandemic	単	2022年2月19日	Hawai'i TESOL (Hawai'i/Online)	（概要）パンデミックと外国語学習・教育について調査するため、パンデミック中に海外留学から緊急帰国した学生やオンライン留学に参加した学生、これに関わった教員らにインタビューした結果をまとめた。緊急帰国をしたグループは、現地で人種差別的な言葉を投げかけられたり、急に帰国したことによる動機付けの喪失を経験していた。また、パンデミック中に入学しオンラインで留学をしたグループでは、クラスメートや教員らとのつながりの持ち方を模索したものの、最終的には留学のモチベーションを高く保てたという声もあった。今後の外国語教育、大学教育、留学のあり方についての示唆を議論した。
6.Finding a stance: Exploring Japanese university students' writing processes and stance formation in L2 writing	共	2021年8月21日	AILA 2021 World Congress of Applied Linguistics (Groningen/Online)	（発表者）川西慧・宇佐美彰規（概要）2020年度のオランダGroningen開催がコロナウイルスのため1年延期になっていたAILA世界大会（オンライン開催）にて、科研プロジェクトの学習者によるスタンスの探索について発表し、Writing Process（執筆過程)のシンポジストとして参加した。
7.研究論文作成におけるスタンスの形成と表明: 学部生の執筆過程の探索的研究	共	2019年12月14日	第203回東アジア英語教育研究会（西南学院大学）	（発表者）川西慧・細越響子（概要）研究論文におけるスタンスの表明については多くの研究がなされ、コーパスを用いたアプローチから熟達した書き手が用いる表現の特徴が示されてきた。本研究は、論文執筆の経 験が浅い中級レベルの学部生を対象に、自身の言語リソースでどのようにスタンスを表明 するかを調査した。本発表では論文の序論を中心に、論証する情報の選択から自身のスタ ンスの形成、使用する言語形式の選択と執筆までに観察された特徴と課題を報告する。
8.Concrete or abstract? Supporting EFL thesis-writing with genre-based grammar	単	2017年6月13日	Faces of English 2: Teaching and researching academic and professional English (The University of Hong Kong)	本研究では、具体的現象を表す表現と抽象的な理論や示唆の書き分けについて、観察と指導の調査を行った。具体的には大学生英語学習者の卒業論文執筆を指導するゼミにおいてアクションリサーチの枠組みで指導及び調査をし、ジャンル分析やルーブリックの使用を用いた指導を通して、学習者のライティングが推敲されていく様子についてまとめた。動詞の相については改善が見られるものの、名詞句の指示については抽象・具体を表す指示について学習・習得は困難なことが見受けられた。
9.Genre based pedagogy for a multicultural and multilingual classroom	単	2017年2月18日	Hawai' i TESOL Conference (University of Hawaii at Hilo)	本研究の目的は、学習者の複文化への意識を成長させ、学術界に存在する様々な「書き方」について意識させるためのジャンル分析の導入について考察することである。発表では、複文化・複言語状況におけるジャンルに基づいた教授法の応用について論じた。特に、1)学習者の自律、2)ジャンル分析、3)気づきの促進、4)ジャンル及び複文化への気づきなどを概観し、学習過程とその結果の分析について概観した。
10.Genre as a culture : Teaching academic writing in the EFL context	単	2016年2月	Hawai'i TESOL Conference (Kapiolani Community College)	（概要）一般に「ジャンル」とは、特定の目的を持ったテキストのことを指す。本発表においては、日本人大学生が、高等学校まで学んできた一般目的の英語(English for general purposes: EGP)を卒業し、学術目的の英語(English for academic purposes: EAP)を学び始める時期に焦点を当て、異文化としてジャンルを分析し、その言語使用域や特別な語彙、文法の指導法を実際の実践例を交えて論じた。
11.大学におけるEAP授業	共	2014年12月	第148回東アジア英	（発表者）田地野彰・高橋幸・金丸敏幸・細越響子・栗原典子・川

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
の設計―学習者データからの示唆			語教育研究会（西南学院大学）	西慧・加藤由崇 （概要）学術目的の英語教育における授業設計について、学習者データを用いて具体的な授業設計とその効果について発表した。個人としては、アカデミックライティング授業における文法の扱いについて発表した。
12.EAP教育への統合型タスク(Integrated Task）の導入	共	2013年12月	第137回東アジア英語教育研究会（西南学院大学）	（発表者）田地野彰・金丸敏幸・高橋幸・細越響子・川西慧・加藤由崇（概要）学術目的の英語教育における統合型タスクの利用について、その効果を受容、産出などの観点から分析し、発表した。個人としては、「書くために読む・聞く」ことに焦点を置いたタスクについて発表した。
13.A task-based approach to academic writing: Can a task facilitate peer interaction?	共	2013年10月	The 5th Biennial International Conference on Task-Based Language Teaching (University of Alberta)	（発表者）川西慧・金丸敏幸・田地野彰（概要）論文の共同執筆作業において、学習者がいかに一貫性を達成するか、また共同執筆作業がいかに学習者間の英語による発話を活性化させるかを発表した。
14.自動フィードバックとピアレビューの統合―アカデミックライティングの授業設計―	共	2013年3月	第19回大学教育研究フォーラム（京都大学）	（発表者）川西慧・細越響子・高橋幸・金丸敏幸・田地野彰（概要）大学のアカデミックライティングコースにおける自動採点ツールとピアフィードバックの統合の在り方について様々な組み合わせを用いて行った授業について報告した。
15.海外留学に求められるライティング技能の育成―IELTS自学自習用教材を活用して―	共	2012年12月	第126回東アジア英語教育研究会（西南学院大学）	（発表者）西川美香子・川西慧（概要）IELTS自学自習教材を検証し、同教材が採用するネイティブスピーカーによるライティングの添削が、機械による自動採点の見落としがちな誤りにも対応できることを発表した。
16.Student errors and self-revisions in L2 writing: An exploratory study	単	2012年8月	The 51st International Convention of the Japan Association of College English Teachers（愛知県立大学）	（概要）上級者の英語エッセイにおいて、よく見られる誤りのタイプと原因を探索した。その結果、名詞の数や定性の誤りが照応指示よりも総称性指示にに関わりがあることがわかり、これが論理性と関わりがあると議論した。
17.ピアフィードバックは提供者自身にどのような影響を与えるのか？	単	2011年9月	第5回言語学・自然言語処理合同勉強会（京都大学）	（概要）フィードバックを「与えること」が先行研究に反して学びにつながらなかった学習者のエッセイについて、誤りの原因を探索した。その結果、冠詞や複数形といった、未習得項目において過剰修正が起こっていることが明らかとなった。
18.Effects of learners' experience of providing peer feedback on their own writing	単	2011年9月	The 50th Commemorative International Convention of the Japan Association of College English Teachers（西南学院大学）	（概要）近年新たに注目を浴びることになったピア・フィードバックを「与えること」の効果をEFL環境で検証し、分析した。ESL環境での先行研究とは異なり、学習者は「与えること」による学びを実感したものの、それはライティングの質には反映されなかった。
19.学術目的の英語教育研究：課題と展望 －語彙とライティングを中心として－	共	2010年12月	第104回東アジア英語教育研究会 （西南学院大学）	（発表者）田地野彰・金丸敏幸・マスワナ紗矢子・北田優方・川西慧・日髙佑郁（概要）学術目的の英語の在り方と京都大学における現在の研究と実践についての紹介を行った。個人としては大学の英語授業におけるピア・フィードバックの在り方についての探索的研究を発表した。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
1.令和3年度武庫川女子大学復帰スタートアップ研究支援費	単	2021年11月1日～年度末まで	武庫川女子大学女性活躍総合研究所	100千円。「パンデミックと外国語教育」という課題のもと、復帰スタートアップ研究支援に採択された。
2.基盤研究(C)（課題番号 17K03040）	共	2017年4月1日より3年	日本学術振興会 科学研究費	2080千円。研究代表者。「英語論文執筆における学習者のスタンス表明―機能言語学の知見を利用して―」という課題のもと、基盤研究(C)として3年間に渡って科学研究費を受け取っている。
3.特別研究員奨励費（課題番号14J06614）	単	2014年4月1日2016年3月31日	日本学術振興会化学研究費	1900千円。「談話文法の知見に基づいた英語ライティング指導―名詞と文体を中心に―」という課題のもと、特別研究員（DC2のちにPDに切り替え）に採択され、2年間に渡って特別研究員奨励費を受け取っている。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2023年8月～現在	全国語学教育学会　会員
2.2023年5月～現在	Asia TEFL　会員
3.2019年4月1日2021年3月31日	大学英語教育学会関西支部ライティング指導研究会　代表
4.2019年4月1日2021年3月31日	大学英語教育学会　第59回国際大会　運営委員
5.2018年12月～現在	アメリカ英語教師協会（Teachers of English to Speakers of Other Languages: TESOL）会員
6.2018年12月～現在	アメリカ応用言語学会（American Association of Applied Linguistics）会員
7.2018年9月1日2018年12月31日	関西英語教育学会 紀要『英語教育研究』（SELT）第42号 論文審査委員
8.2017年2月～現在	Osaka JALT Journal 査読者
9.2011年4月1日～現在	全国英語教育学会　会員
10.2011年4月1日～現在	大学英語教育学会 会員